

プラス思考で新たな活動に意欲

昨年来のコロナパンデミックによる公演の中止や延期、観客制限で、クラシック音楽界では、2020年の事業収入が前年に比べ半減したことがわかった※。大阪府吹田市出身で同市を拠点に活動する堀江牧生さん、恵太さん、詩葉さんの三きょうだいもそうしたコロナ禍の直撃を受けてきたが、ファンや公演主催者などの励ましを支えに、いま新たな活動に取り組んでいる——。

※文化芸術推進フォーラム調査報告書(ダイジェスト版)2021年6月9日

コロナ禍で心境が変化

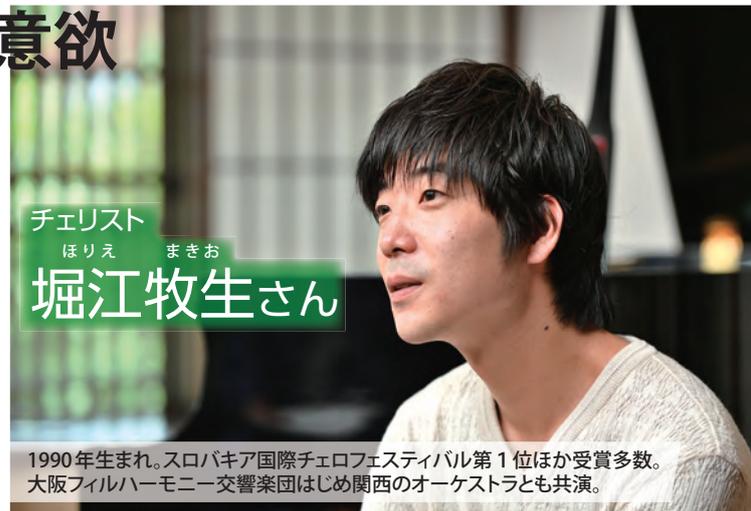
「ホールを満席にしなくてはならないというストレスから解放されました」。牧生さんはそう言って苦笑するが、それは音楽家が日々抱く集客への不安を代弁しているようでもあった。「お客様にもゆったりした空間でお聴きいただけるので、座席数を制限してよかった。その分、チケット料金を少し割増したこともありましたが、お客様にはご理解いただき感謝しています」という。

牧生さんは、東京音楽大学を経てモスクワ音楽院(ロシア)、ウィーン国立音楽大学(オーストリア)を卒業後、ロシア国立ボリショイ劇場管弦楽団に1年間所属。2019年に帰国後、吹田メイシアターで「堀江牧生のチェロの朝」を毎月開催し、平日の午前中にもかかわらず平均70人以上の観客で好評を博した。昨年10月から今年3月にかけては、静岡県文化財団の助成を受けてYouTubeによるクラシック音楽番組『どうるーじば』(ロシア語で「友情」)を配信。司会進行役を務め、モスクワ音楽院の同期との演奏や留学時代の思い出など、興味深い話題を発信している。「演奏家が自ら発信の場を持ち、ステージで伝えきれないことを伝えられるのはいいこと。演奏家の素顔を知りたいというニーズにお応えできるのも配信ならではの」とほほえむ。

今年は、自身の企画・プロデュースでCDデビューも果たす。「本音をいえば、(コロナ禍で)ついにそこまでやるのがなくなってきたかという感じ」と話す牧生さん。演奏をライブで聴いてもらいたい牧生さんは、何度もとり直して、良い演奏だけをCDに閉じ込めるといふことに、長らく気が向かなかった。しかし、コロナ禍で心境が変化。「クラシックの演奏会に行くことが贅沢になってしまった今、家で手軽に聴ける状況を作りたかったのと、クラシックが日々の生活に浸透するためにはCD化も必要だと思いはじめました」という。なにより共演者である『どうるーじば』のピアニストたちが喜んで参加するといってくれたことが嬉しく、CD制作の決心がついた。牧生さんは今年6月、『バッハ無伴奏チェロ組曲・全曲演奏会』(豊中市立文化芸術センター)を開催した。2時間以上にわたる長丁場の独演は、それ以上に体力や集中力、準備力が必要なCD制作に向けて良い経験になったという。

室内楽は人生と同じ

恵太さんも昨年来、出演予定のコンサートの多くが中止を余儀なくされてきた。とりわけ自主企画の演奏会では、



チェリスト
ほりえ まきお
堀江牧生さん

1990年生まれ。スロバキア国際チェロフェスティバル第1位ほか受賞多数。大阪フィルハーモニー交響楽団はじめ関西のオーケストラとも共演。



ヴァイオリニスト
ほりえ けいた
堀江恵太さん

1992年生まれ。第6回横浜国際音楽コンクール大学生弦楽器部門第1位ほか受賞多数。ジョージア国立トビリシ音楽大学オーケストラをはじめ国内外のオーケストラとも共演。



ピアニスト
ほりえ ことほ
堀江詩葉さん

1997年生まれ。2015年全国ロシア若い音楽家のためのピアノコンクール『メルズリヤコフカ』第1位ほか受賞多数。2019年5月にロシア国立ウリヤノフスク交響楽団と共演。

出演を依頼していた仲間に対して申し訳ない気持ちでいっぱいだったが、「こんな時期だから仕方ないよ」という一言で気持ちは救われた。コロナ禍で勉強する時間を与えられたと気持ちを切り替え、出演予定がないときは基礎練習をしたり、楽譜や文献を読み込んだりと、「コロナだからといって暇な時間はない」と前を向く。また、昨年はコロナ禍で海外の演奏家を呼べなくなったため、NHK(FMラジオ)主催による牧生さんとのデュオ・リサイタル(NHK大阪ホール)のような仕事も舞い込んだ。

ヴァイオリンをはじめたのは3歳のとき。牧生さんを見て

自分もやりたくなったからだが、兄と同じ楽器だと上達を争って喧嘩してはいけないという両親の配慮からヴァイオリンが渡された。小学6年生から高校3年生まで、指揮者の佐渡裕氏率いる「スーパーキッズ・オーケストラ」(兵庫県立芸術文化センター)に参加。全国からオーディションを通過した腕利きの仲間と合奏する楽しさに目覚め、佐渡氏が全力で音楽に向かっている姿に強く惹かれた。「全力で向かうとは、人生をそれに捧げるとのこと。自分も音楽家として、“音楽に仕える”生き方をしたいと思うようになりました」と振り返る。

京都市立芸術大学音楽学部弦楽専攻を首席で卒業後、ウィーン国立音楽大学修士課程を最優秀で修了。群馬交響楽団やシンフォニア・アルシスOSAKAにコンサートマスターとして客演した経験を持つ。とりわけ自身が率いる弦楽四重奏「ケイタ・リング・カルテット」や、兄妹とのピアノ三重奏「堀江トリオ」など室内楽への思いは熱い。「室内楽は人生と同じだと思います。自分の考えをしっかりと伝えて伝えつつ、相手のパーソナリティを尊重し、その上でより良いものを一緒に創っていく。演奏家としても一人の人間としても、そうありたいと思っています」という。小学6年生から大学時代までギオルギ・バブアゼ氏(関西フィルハーモニー管弦楽団・コンサートマスター)に師事してきたこともあり、そうした師匠たちへの憧れから、コンサートマスターとしてのやりがいも感じている。

憧れの先生に直談判

モスクワ音楽院に在学中の詩葉さんは、ロシアのコロナ禍を避けて昨年4月に帰国。その後は戻ることができず、日本にいながオンライン授業を受けることになった。当初は対面授業が再開すれば直ちに学校に戻るつもりだったため、出演依頼があっても予定が組めず断らざるをえなかった。

先が見えない中、少しでも多くの人に自分の演奏を聴いてもらおうと始めたのが、YouTubeによる動画配信だった。牧生さんとのデュオでは、クラシックだけでなくポップスや映画音楽など、コンサートホールでは見せないリラックスした雰囲気での演奏やトークが好評を得ている。「大阪以外の人にも私の演奏を聴いていただけるし、ホールにお越しいただきにくい人にも、お家で楽しんでいただけるのはすごくいい」と、兄たちと同じくコロナ禍のつらさをプラス思考で乗り切っている。

詩葉さんは4歳でピアノを始めた。学校教師になりたいと思ったこともあったが、中学生になって音楽の奥深さや自由に表現できることがだんだんわかるようになり、のめり込んだ。いずれ留学するなら早い方がいいとの助言を得て、中学卒業後はモスクワ音楽院附属アカデミー(日本の音大附属高校に相当)へ。ロシア語は分からなかったが、学生寮のルームメイトから「ロシア語字幕のついた映画を見るといい」と教えられ、日本のジブリアニメやハリーポッターを毎晩のように観たり、ルームメイトの会話を注意深く聞いて叩き込んだりした。なにより心強かったのは、モスクワ音楽院に在学中の牧生さんが、ピアノレッスンの際に通訳として付き添ってくれたこと。「レッスンを録音しておいて、後で先生のロシア語と兄の日本語を照らし合わせて復習するんです。とても正確な通訳でした」と、牧生さんに感謝の眼差しを向ける。



モスクワ音楽院に進学する頃には通訳もいなくなり、持ち前の度胸で、憧れのピアニストであり教育者としても名高いエリソ・ヴィルセラーゼ氏に直談判して指導を願い出た。「とても厳しい先生。新しい楽譜を渡されると、3日後には完全に暗譜して弾けないと怒鳴られます。“音楽をするために来ているんでしょ!”って」と、思わず背筋を伸ばす詩葉さん。1日8時間以上練習室にこもることも普通で、兄たち同様、演奏家としての真摯な姿勢はこうして培われた。

「堀江トリオ」として

牧生さんが6歳のときに始めた「堀江ファミリーコンサート」は、父で朝日放送(ABC)アナウンサーの堀江政生さんが司会を務め、今年で第26回を迎えた。恵太さん、詩葉さんが加わるようになってからは「堀江トリオ」として出演。昨年8月にはザ・シンフォニーホール(大阪市北区)の主催で無料ライブ配信が行われ、現在も配信中で、多くの人が視聴している。また、クラシックの解説や演奏家の日常などを紹介する「堀江トリオのYouTubeラジオ〜土曜の夜はおうちでクラシック」も好評で、今年5月で1周年(第50回)を迎えた。同番組は毎回ジョークの飛び交う賑やかな掛け合いで進行するが、生演奏や過去の演奏動画では表情が一変。力感あふれる演奏で、聴く人の心を惹きつける。

「私たちのモチベーションは、“上手になりたい”に尽きません。良い音を出し、良い演奏をするために練習したり、いろんなことを試したりするのですが、そのゴールは見えないし、一生費やしてもたどり着けません。だから私は生まれ変わっても、またチェロを弾いていると思います」。牧生さんの言葉に、時代の禍福にぶれないアーティストの本質を感じた。

(ライター 三上祥弘)



左から堀江恵太さん、詩葉さん、牧生さん。
2021年6月8日 / 桜の庄兵衛(大阪府豊中市)にて